

Newsletter

SEP. 1999

http://www.aack.or.jp

目次

紀行

ブータン氷河湖決壊洪水調査記

上田 豊 …… 1

富士の裾野に秘境あり

新井 浩 …… 5

山岳研究

山と雲と蕃人と

廣瀬 幸治 …… 7

随想

「亀」と「岡長」のこと

四手井綱英 …… 8

梅里雪山報告

「梅里雪山勇士記念碑」除幕式に

参列して 船原 尚 …… 9

梅里雪山峰登山隊

搜索報告から抜粋 …… 11

遙かなる徳欽より 小林 尚礼 …… 11

ヒュッテ再建

笹ヶ峰ヒュッテの片づけと地鎮祭

横山広太郎 …… 12

ヒュッテ再建進捗状況

田中 二郎 …… 13

お知らせ

梅里雪山・氷河トレッキングと

玉龍雪山ハイキング十一日間 …… 14

関東木曜日の会

米本昌平 吉野作造賞を授賞 …… 15

会員動向

訃報 …… 16

編集記 …… 16

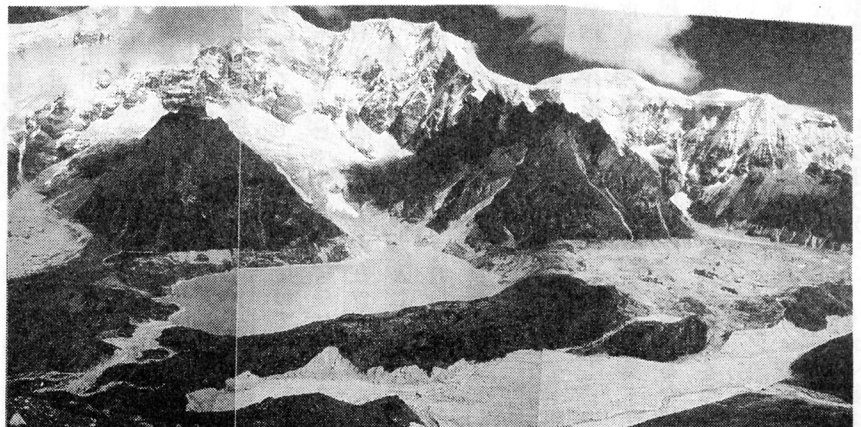
ブータン氷河湖 決壊洪水調査記

上田 豊

三十年ぶりのブータン

一九九七年十月末、カトマンズからパロへ向かうドウルック・エアー機の左側の窓際席は、始発のデリーからの乗客で占められていた。しかも普通席の窓からの視界は、主翼のエンジンで大きくさえぎられている。離陸して間もなく、居並ぶネパール・ヒマラヤの高峰間近を飛びカンチェンジュンガ、ヤルンカンが近づいてくる。エグゼクティブ席へ行けば通路からでも窓越しの視界はまりました。来たらダメと言われたが、エグゼクティブの通路にひざをつけてしつこく山を見る。スチュワードスは、機内サービスの行き来に邪魔なので空いていた右側の席に座らせてくれた。数日まえの悪天のためかカンチ山塊は雪に覆われている。なつかしいルートを目で追いきれないまま、機はさらになつかしいブータンの上空に入った。

一九六七年一月、わたしが学部を卒業する年に当時厳しい入国制限のあったブータンへの遠征話が起り、卒論そっちのけで奔走した。そしてブータン最高峰ガンケルブンツム登頂をめざす京大山岳隊が故・小野寺先生を隊



ルナナ地方の氷河湖とテーブル・マウンテンズ。
左の湖がブータンで最も危険とされているラフストレン湖、右が表面で多数の池が拡大・合体中のトルトミ氷河下流部、手前は1994年のGLOFが浸食した河床。

長として組織された。この山への、少なくとも日本からは最初の登山計画であつたらう。難関は承知のうえで手はつくしたが申請は認められず、計画はガンケルプンツムとマサコンの登路偵察および地理・氷河・気象調査のための山岳域旅行に縮小された。ブータン政府から登山と観光の許可を得て募金をし、当時ブータンの外交権を持っていたインド政府からインナーライン通過許可を取得するため、十一月末わたしはデリーへ飛んだ。この許可も難題で、わたしの昔のファイルには、当時の内閣官房長官・木村俊夫氏宛の奥田東・京大総長からの協力依頼文書なども残っている。

半年間ニューデリーでねばつたものの壁は厚く、結局六八年一月に小野寺隊長と一週間、六月に市川隊員と十日間の観光旅行しかできなかった。夢見たブータン・ヒマラヤの山々は遠い雲の中に隠されていた。それから一五年経ってブータンでの登山も認められ、お金さえあればトレッキングや観光も自由になっている。当時の顛末は京大山大岳部の報告一五号（一九七〇）に残されているが、振り返られることもなくなつて久しい。わたし自身のなかでも、その後ネパールやチベットに執心してきて、ブータンへのあの頃の思いが風化し去ろうとしていた。未知の魅力が薄れた誰でも入れるブータンは、あの頃求めたものとは違うんだという意地めいたものが、隔世の感がする中である種の違和感につながつていたのかもしれない。

そんな状態から目が覚めたのは、つい二年くらいまえのことだつた。ずっとヒマラヤの氷河研究を続けてきたが、ブータンの氷河学的調査はまだどこも手をつけていないまま残されている。そこ

での氷河変動がとりわけ興味深いことは、昔も今も変わらない。

新たなヒマラヤ氷河調査計画にブータンを組み込み、文部省の科学研究費がついて、三十年ぶりのブータン再訪となつた。今回は、関係者と話し合うことが目的の五日間だけの訪問だ。

ブータンには、外国からの調査申請を認める制度はまだない。まず、やりたいことに関係者の理解を得て、どれだけの事ができ、どんな点でブータンの役に立てるかを探る必要があつた。地球温暖化のもとで近年の世界の氷河縮小が、モンソンの夏雪で涵養されるヒマラヤでとりわけ激しいと考えられることは、ニュースレター七号「縮小加速・ヒマラヤの氷河とACK」(一九九七・十一)に記した。ブータンでは夏雪がことに多いため、氷河縮小も一層激しいと推察された。そしてブータンでは、一九九四年十月にルナナ地方の氷河湖が決壊して二人が死亡し、下流のプナカの集落や城にも被害を与えた。多数の氷河湖をかかえるブータンでは、今後の氷河湖決壊洪水(GLOF)の対策が国家的問題となつていた。氷河変動はその末端の氷河湖の動向と密接に結びつく。ここに、ヒマラヤの氷河に最も詳しいと自負するわたしたちとブータン政府との接点があつた。

ACKの栗田さんの紹介で内務大臣、計画大臣さんらにACKの月原さんの橋渡ししてJICA専門家・茂木氏、また同氏が派遣されている氷河湖災害担当のブータン地質調査局の局長などと実りのある話ができた。当初は観光ビザでどの程度氷河を見て回れるか探るつもりだつたのが、共同プロジェクトとして現地調査による氷河湖の危険度評価、

人工衛星画像の提供、氷河雪氷に関する研修・留学の世話などを提案することとなつた。こうして招待ビザで調査できれば四分の一の費用、つまり同じ予算で単純には四倍のことができ、ブータンに還元できる成果も充実することになる。

ブータンの期待にこたへるには、それなりのメンバーが要る。氷河湖の危険度評価には地形学者の目が欠かせない。またブータンは氷河地形の宝庫だ。信頼できる氷河地形学者に参加してもらうあてはある。自分については、氷河湖の専門家ではない。ただ、三十年前インドでのブータンへの入国交渉末期に市川とネパールのロールワリン・ヒマールに行つた。その時に見た巨大なツォ・ロールパ湖に決壊の危険を感じ、帰国後この湖の変化に関する情報をあちこちから収集したことがある。当時、ガンサーのブータンの氷河湖に関する報告やカラコラム、ネパールの情報も集めて勉強した。おそろく日本では、ヒマラヤのGLOFに関心を持つて動いた最初の人間だろう。現在ツォ・ロールパは、ヒマラヤで最も危険な氷河湖としてネパールがその対策に取り組んでいる。それにはわたしの仲間も何人か関係しているの、情報も蓄えている。なんとか役に立てるだろう。

首都ティンプーでの用を終え、前回オンディポタンからロバで往復したプナカへ車で向かつた。途中で、京大山岳部寄贈の大双眼鏡があるドチュ・ラを越える。ブータン・ヒマラヤを見るためむかし三度ここに来たが、すべて雲に期待をうらぎられていた。

やっと見えた。曇天ながらマサコンが、双眼鏡の中で間近に頂部の雪稜を光らせていた。ガンケルは今回も雲の中。その日のうちに、パロへ移つ

た。翌最終日、チェレ・ラへ車で登る。いとも簡単に、青空に白く映えるチョモラリが初めて見られた。山岳トレッキングの入口ドウゲ・ゾンに寄って、来年ここから調査に出発できるようにと心に誓った。

最後にどうしても寄りたかった、かつての西岡農場を訪れた。一九九二年に西岡さんは現地で亡くなられたが、三十年前には随分ごやつかいをおかけた。当時ブータンに來られて四年目の開拓者であつたご夫妻のお宅に市川と招かれたとき、「本当にブータンのことを考えてくれる人が来てくれればありがたいなあ」とおっしゃられた。あの頃学生だったわたしは、ブータンの将来を担う大臣級の方々に、「わたしたちは山が好き。未踏の山に登りたい。どうかー」という風にお願ひしていたのだろう。思い出せば、はずかしい感じがする。わたしにできることは、氷河研究。今やヒマラヤの国で氷河を研究しようとするとき、GLOFは避けて通れないと痛感した。

翌朝、パロ発パンコク行き飛行機の左窓際に陣どる。機は南向きに高度を上げる。後ろを向いて顔を窓にこすりつけると、やっとの方角に遠くガングルプンツムをとらえた。が、三十年越しの初見を味わう間もなく、視野から外れた。

氷河湖を巡る旅

あらためてGLOF評価のための共同プロジェクトとしてプロポーザルをしたため、ブータン政府に送った。十二月には、カウンタートパートの地質調査局の所管である通産大臣が、翌年秋の現地調査に招待ビザ発行手続きを指示したとの連絡がもたえた。かつての夢が別の形でかなえられること

になった。

現地調査メンバーは、氷河地形のベテランで、ネパールやチベットで一緒に仕事をしてきた都立大の岩田修二教授（六甲学院山岳部で井上治郎の一年後輩）が参加を快諾してくれた。かれの博士課程学生の奈良間君、わたしの研究室から博士課程学生の内藤君（京大山岳部OB）と坂井さんを加え計五人の隊ができた。学生たちも皆、海外調査を数度経験している。

調査ルートは、既成のトレッキング・ルートでは最もブータン・ヒマラヤを広く見て回れる「スノーマン・トレック」を軸とし、適宜調査を加える。これで、チョモラリからルナナ地方まで、ブータン・ヒマラヤの西半分をカバーできる。ふつうのトレッキングなら総距離三五〇キロ、三週間余りの旅だが、調査のため二週間ほど加えたので、歩く距離は五百キロに届こうか。おまけに高度四、五千メートル級の峠を十以上越えねばならない。毎日一五―二〇キロを何週間も歩くなんて、もうここ数十年以上やっていない。ルーチ的なトレッキングの苦手なわたしは夏に入ってから、マイカーのアップローチで名古屋―塩見岳・日帰り登山とか、出張の帰りにバス・新幹線を利用して東京―富士山（北―南・縦断）―名古屋を一日でとかの負荷をかけた。しんどいだけで山登りを楽しむ余裕は持てなかったが、まだ何とか無理がきくことは確かめられた。

一九九八年九月七日、カトマンズからブータンに入る。ティンプーで通産大臣に会見。「十年前だったなら、あなた方の提案は相手にされなかつたろう。地球温暖化と九四年のGLOFが起こったから受け入れられたのだ」と気さくな大臣は、は

つきりと言われた。ブータンはインドと共同で氷河湖の現地調査をしたことはあるが、他国から最近提案があるものの、わたしたちが最初だった。

調査旅行には、地質調査局からカルマ君（二七歳）が同行する。トレッキングの世話は、ローメン社、ガイドは京大マサコン隊以来のベテラン、イシ・ウオンチュック。今夏のモンソンは、ネパールでもブータンでも異常に雨が多かつたと聞く。そのためトレッキング二日目のルート上の橋が流されたそうだ。高度二五〇〇メートルのパロから四〇八〇メートルのチョモラリ・ベースまで谷沿いに三日かけて高度を上げるつもりが、四千メートル以上の峠を三つ越えて迂回せねばならない。二日目は一気に一五〇〇メートル登って四千メートルを越えないとキャンプ地がないそうだ。メンバーの最初の高度順応がこの調査成功の必須の鍵と考えていただけに、きつい。トレック出発前日、ティンプーからパロへ移る途中でチェレ・ラ（三七〇〇メートル）へ車で上り、そこから各自の体調に合わせて数百メートル登って高度を経験した。

九月十一日、去年誓ったドウゲ・ゾンの出発点を荷馬一六頭を整えて踏み出す。最高の天気だ。川沿いの緑と農家、畑、花、樹林のなだらかな道をのんびり歩く。二日目、やはり流失した橋は修復不能で迂回ルートを行くしかなかった。メンバーの体調を気遣いながらの日々が始まる。四日目、四九〇〇メートルの峠を一人は馬を使って越え、チョモラリを見上げるヤングタンの野営地になんとかたどり着く。この間三隊員が、順化促進を期待してダイアモックスを使ったものの共に不調だったが、症状の軽減には役立っていたようだ。こ

ここで九二日あてて調査し、不調のメンバーを休養させることができた。ここ数日間、あれこれと対策を最悪の事態まで、書きつくせないほど考えた。ヤングタンの最後の夜は、珍しく寝る前から満天の星。月は見えなかったが、チョモラリが氷と岩の巨大な壁の全容をにぶく光らせていた。

翌朝、荷をヤク一三頭、馬一頭に替えてリンシに向かう。入国日から続いていた好天が、雨がちのモンズーン・パターーンに戻った。パロを出て一二日目、九月二二日にルート上最大の村ラヤ(三八二〇メートル)着。トレック行程半ば近く、日程では三―四分の一、ここまでで六つの氷河湖を調べたが、特に危険な湖はなかった。メンバーは皆ベースをつかんで調査本番まえの第一ステージを終え、一安心だ。初めて全員休養日をとる。見物とみやげ売りの村人で落ち着かない。ロキシーンにはじめてありつくが、水くさかった。

ラヤをヤク七頭、馬十頭とともに出て三日目、五五歳の誕生日に四九六〇メートルでキャンプ。はじめてのアラレが激しくテントをたたたく。日本からのコーヒーズリーとガイドからのウイスキーが出た。シラフに入ってからテントに雪があたる音がする。明日の峠越えが心配だ。時々外に出て、積もり具合を確かめる。南の空に雷光頻発。

翌朝、積雪はまばらでガンラ・カルチュン峠(五一四〇メートル)を難なく越える。氷河と岩峰が間近にせまっていた。アラレ、ミゾレが降り出す中、泥道を下る。やがて雲も切れ、ガンサーのマウンテン・ワールド誌の写真で見られたふたつのタリナ氷河湖が正面の谷奥に見えた。その写真のコピーをとりだし、ほぼ同じ場所に立って見比べる。GLOFの跡を物語る一九六七年当時の広

い土石の河原は、今は植生に覆われている。右の湖は、上手にあった当時の氷舌が著しく後退し、その部分が湖面となって伸長していた。翌日、両方の湖を縁取るモレーンに登る。双方とも湖の上手は切り立った岩壁がそびえ、その上端には氷河末端の氷塊群が今にも崩落しそうに乗り掛かっている。これが大規模に落下すれば、洪水の引き金となるのだ。

九月三日、ポ河流域に入る。兩岸の浸食・崩落と河原沿いの流・倒木が凄まじい。九四年に源流で起こったGLOFに襲われた跡だ。わたしたちの責任の重大さを強く感じる。翌日、調査の核心部であるルナナ氷河湖群への拠点タンザ村(四一六〇メートル)に到着。ラヤからここまで、十一の氷河湖を調査した。ここでは調査に一週間をあてる。

タンザのすぐ上流には、ブータンで最近もつとも危険と見なされているラフストレン湖(二X一キロ)がある。GLOFは氷河湖をダムのように堰き止めているモレーンが決壊して起こる。モレーン・ダムを掘り下げて水位を下げればダムにかかる水圧も減り、決壊の危険は軽減される。だが掘り下げに爆薬を使うと、もともと脆弱なモレーンの決壊を誘発する恐れがある。山間の僻地なので、掘削の重機も搬入できない。そこでブータン政府は毎年夏に五百人ちかくを各地から動員し、人海戦術で三年間かけて四メートル掘り下げた。ちょうどその最終年度の工事が終わったところで、ここ数日の道中で帰村する大勢の人たちとすれ違った。タンザには、大テント村の跡と、撤収間近の地質調査局や内務省のスタッフのテント列がある。大部隊の撤収のため周辺の輸送力はさらわれ、

わたしたちの今後の行動に大きな制約となった。タンザをベースに毎回目帰り、九四年GLOFを起こしたルゲ湖(一・五X〇・七キロ)や氷河表面の多数の池が拡大・合体中のトルトミ湖、モレーンを掘り下げたラフストレン湖などを調査した。これら三つの氷河湖は、一九五〇年代の地図では、まだほとんど出来ていなかったのが、いま満々と水を蓄えている。それぞれは別々の氷河の末端部にあるが数珠繋ぎに接しており、どれかに異変が起きれば他に連鎖する危険もはらんでいる。毎夏の注意深い監視が不可欠だろう。

十月四日をさかいに、天気はポスト・モンズーンの好天パターンに転じた。ラフストレン湖では深さと水温分布の観測にゴムボートを使う。昼にはボート観測を終えておかないと、下流からの谷風が発達してボートが帰れなくなる。月明かりのもとキャンプを出た。明け方のほのかな明るさのころ湖岸着。この観測は紅一点の坂井が主役でボートに乗り、ラフティングをやる奈良間が漕ぎ手。岩田と内藤はボートの観測点毎の位置を土手から測量し、わたしはビデオ撮影。静かに光るグレイシャー・ミルクの湖面を、ボートはかすかな点となるまで氷瀑に近づく。測量班のデータ読み取りの音が時々ひびく。わたしは、ビデオカメラのパンとズームを繰り返す。時折、雪崩の音。ボート班は四時間の観測でフラフラになって戻ってきた。湖の最深部は約百メートルだった。

この調査の仕上げに、ルナナ氷河湖群のほぼ全貌を望むタンザ対岸の丘に登る。持参した京大隊・月原氏の一九八四年のパノラマ写真と同じ地点に立って、十四年間の変貌をチェック。氷河の後退と氷河湖の拡大は明白だ。その間にあった九

四年 GLOF の浸食跡やモレーン掘り下げによる流路の変化も見て取れる。その場で三時間、テール・マウンテンズの景色も楽しんだ。

十月九日、タンザ周辺でガイドがなんとか掻き集めた一八頭のヤクと共に帰りのルートに入る。ヤク使いの不平が多くガイドが苦労している。翌日、最後の氷河調査の拠点となるジチュ・ダモ着。ここでは氷河変動を今後詳しくモニターしていくのに適当な氷河を選び、測量する予定だ。着いてすぐに内藤と二手に分かれて手頃な氷河を捜すが、全体を歩けるような氷河が見つからない。

キャンプ地の南の氷河を測量することにして、次の日ひさびさの重荷をかつぐ。内藤はタンザにも置いてきた自動気象観測装置を氷河の周り二箇所に設置する。他の三人は写真測量の基点づくり。わたしは一人で氷河の上へ。氷河上は下流部しか歩けそうにない。下流部は高さ数十メートルの氷丘が大波のように連なるけつたいな氷河だ。ひさしぶりにアイゼンを履き水を踏みしめる。その感触を楽しみなが、氷丘の凸部を選んでたどる。ブータンのヒマラヤ襲の峰々に取り囲まれ、感無量。

あと二日ここで調査にあてる予定が、翌朝ヤク使いが一日しか待てないとこね、急きよその日で片づける。十月十三日、五千メートルを超える最後の峠ガンリンチェンゼ（五二〇〇メートル）へ。この周辺の氷河も月原氏の写真と比べると顕著に後退している。全体に、後退速度はネパールに比べてかなり大きいようだ。峠のダルシンが風にはためく。彼方には、ガンケルプンツムの横長の頂稜が、手前の氷河のなだらかな鞍部のむこうに頭を見せていた。飽きるほど眺めた。

ルートは氷河域を離れ、樹林の溪谷を下る。またの急登で峠越えも最後となり、水食谷に残された氷河湖の深い青さになごりを惜しんだ。十月十七日、ニカチュでブータン横断車道に出る。本当にくたびれた旅だった。それから十日すぎて関西空港に着き、名古屋へ帰る新幹線で缶ビールを飲みこんだ時、はじめて？ブータンを「やったぜ」と思った。

調査の結果は、衛星画像解析も加えて報告書にまとめ、翌九年六月ブータン地質調査局に提出した。ルート沿いの三〇の氷河湖について、台帳のデータ・シートと危険度評価のチェック・シートを写真集と共に付けたので、計一六一頁となった。この秋には内藤と西川（ACK）が、自動気象観測装置の通年データ回収と氷河変動調査のためルナを再訪する。同時に地質調査局から九八年調査に同行したカルマ君が、日本の国費留学生として氷河学の修士課程に入るためわたしの研究室に来る。今後、ブータンとの氷河を通したつながりの持続・展開を大切にしていきたい。

GLOF（氷河湖決壊洪水）：Glacier Lake Outburst Floodの略。氷河湖には、氷河末端部が融解した跡にモレーンが融氷水を堰き止めてできた湖と、前進した氷河の水が脇の流水路を堰き止めてできた湖がある。前者のモレーンが崩れたり、後者の氷河が後退して決壊するとGLOFが起る。ヒマラヤでは前者のタイプが一般的で、モレーンに氷が含まれていると融けて決壊しやすい。後者はカラコラムに多く、いずれの場合も氷河雪崩が湖を直撃したショックなども決壊の引き金となる。

（一九九九年九月十日受理）

富士の裾野に秘境あり

新井 浩

（一九九九年八月一九日記）

十里木高原の宿「愛鷹荘」が、待ち合わせ場所であった。松野車（松野夫婦）も、先着の新井車（小林、小川、高野、新井）に続いて到着する。今回の趣向は、一昨年に新登山道を八五年ぶりに復活させた須山道をたどり、樹林帯を通って宝永山に至るといふもので、どのガイドブックにも載っていないコースを試みるものである。

八月九日（一九九九年）、夕食前に宿の近くの十里木高原を見渡す公園に出掛けた。ここは国府犀東の七言絶句の詩碑があるところで、富士の全景が見える。昔の五拾銭札を飾った図である。あいにく我々の前の富士は、西日のせいで日陰の富士であった。笠雲をいただいているものの裾野を左右に雄大に引いており、満足の行く風景であった。よく見ると、明日の目的地である宝永山の噴火口が大きく富士の正面にあり、あまり見かけぬ富士山との対面であった。

八月十日、暗いうちに起きる。十里木別荘地を抜け、日本ランドHOWの南富士エバゲリオンを駆け登る。静かな朝であった。広々とした水ヶ塚駐車場に着く。この時期富士登山のマイカー規制で、ここでバスに乗り換え新五合目に向かうことになる。かなりの数が駐車していた。富士山は残念ながら雲の中であった。本来なら朝日を浴びる雄姿が身近に望めるというのに。朝弁当を摂った後、いよいよ出発となる。南西の方向、駐車場

越しに大きな虹が架かっているのを見つけ嘆声をあげる。

そもそも須山道は、古来から利用されていたが、東海道線御殿場駅が出来、客が流れてしまったこと、又、陸軍が演習場に占拠したことで、須山口登山道は衰退してしまつたのである。ところが地元の前渡徳逸氏が昭和五年以来、この登山道の復活に情熱を傾けておられた。ようやくその機運が盛り上がり、翁を中心に人々が集まり、ここに手作りの歩道が復活したのである。渡辺翁は九十九才の須山登山道の生き証人で、市立富士山資料館の名譽館長をされている。私は昨年十二月にお目にかかったが、記憶力抜群に驚き、富士の環境保護を説き、須山を愛する情熱には、まったく頭が下がる思いであつた。

須山道のスタートポイントは、須山浅間神社である。実は前日訪れているのだが、境内には五百有余年の老杉があり、森閑とした神域であつた。この出発点からの前半部については、我々は割愛することにした。ルートを記しておく、浅間神社―貯水場―外周道横断―忠ちゃん牧場―富士山資料館―弁当場―十里木キャンプ場―鉄塔―フジバラ平―大調整池―水ヶ塚水源―水ヶ塚駐車場となる。約五時間所要である。

さて、登山入り口一合目は、標高一四五〇メートル。樹林帯の登山道は、幅広く、シノダケなどの下草刈りがなされ、歩きやすい。富士登山と言えば、ガラガラ溶岩と砂礫の道が定番であるが、この須山道の後半部は、緑濃き林間にあり、心相む道であつた。樹木に名前表示が付けられていて、至れり尽せりとなつていた。ミズナラ、ブナ、キハダ、ヒメシヤラ、モミ、カラマツなど。足元の

周りには、カニコウモリの花盛りがあり、ホタルブクロが沢山出迎えてくれた。ヤマハハコ、イチヤクソウ、キオン、アザミなど。ガクビソウの大群落には初めてお目にかかった。季節を変えれば、特に五月末あたりはさぞかし見事な花々に会えるであろう。さらに耳を澄ませば、ウゲイス、ヒガラ（ツツピンツツピン）、メボソムシクイ（チヨリチヨリチヨリ）、コルリなど。時々、木の間越しに下界が見えたが、ガスが濃くなり、昨日の笠雲、朝の虹で予報されていたように、天気は悪くなりつつあつた。

いつしか霧シオンになつていた。時々小雨。雨具を着ける。標高二千メートルあたりから、カラマツ林は背が低くなり、枝振りは強い西風のため東側のみの伸びに強いられている。渡辺翁の命名になる「御殿庭」に着く。台地状の斜面に山岳庭園とも言える巨石やコケモモなどのカーペットが敷かれた空間があつた。御殿庭中が二一五〇メートル。御殿庭上が三合目で二二七五メートル。森林限界をそろそろ抜け出すあたりから風雨がきつくなつてきた。砂礫の道になる。一見コマクサと見間違えたが、それは矮小化したホタルブクロで、健気にも散在しているのであつた。雨のムラサキモメンヅルは可憐であつた。

すぐ上に砂礫の丘が見えてきた。吹きさらしの登路で、一段と風が激しくなつた。せめてあの丘の上までと、励ましあつて登る。四合目二三五二メートルで、宝永山第二火口の縁にたどり着き、直ちにUターンする。立つていられない風の強さや、雨に濡れて寒さがこたえてきたり、先が何も見えない事態になつたことが決定的となる。トラパスして予定していた下山路をとることを考え

ないでもなかつたが、このシルバー隊では、すんなりバックするにしかずと、敗退を甘受した。

樹林帯に引き戻ると、ウソのように風は止んでいた。救われた感じで、ゆっくりおやつを摂る。もう登ることなく、後はただ下るのみ。悪天の中ここまで登ることが出来たのは、豊かな樹林があればこそであつた。ミカンの缶詰を開けたり、氷ブドウをつまんだり、楽しい憩いがあつた。

もはや勝手知つた下り道を、余裕を持って周りを見渡しなが、歩を進める。「意外にきつい道だつたなあ。」「台風の倒木が多いなあ。」「鈴なりのホタルブクロがほれあつちにも、こつちにも。」「あつ、珍しい蝶だ。」それはアサギマダラだつた。何頭も乱舞しているのであつた。まるで夢幻の境地にあるようだつた。我々以外に一人も会わない、我々だけの至福の時間であつた。これこそ秘境といつて良いだろう。須山道の後半部の静けさを、じっくりと味わいつつ、長い下りを水ヶ塚へ向かう。大満足であつた。

駐車場の隅にある東屋で遅い昼弁当を摂る。青空が見え日が差してきた。濡れ物を乾かす。しかし、出発する時は、再び雨となる。「けつたいな天気だなあ。安全運転で帰ろう」と、二台の車は無線交信をしながら、河口湖の温泉を目指した。

(一九九九年九月七日受理)

「山と雲と蕃人と」

鹿野忠雄の著作と業績

廣瀬 幸治

一九四一年に台湾中央高地の登山記「山と雲と蕃人と」が出版された。著者は鹿野忠雄、わたしは中学生のころに読んで、つよい印象をうけて以来この本のごんなく気になりながら半世紀がすぎた。ここに収められている山行のうち、二八年の卓杜大山を除いて、すべてが三一年の八月上旬から約一ヶ月間の記録である。その間にいづれも三千メートルを抜く高峰一六座に登り、それには六座の初登頂がふくまれている。当時この地方の測量が未完で、地図がいい加減であったこと、夏の台湾は台風の通り道で天候が不安定なこと、また直前に霧社事件があつて、当時生蕃と呼ばれた高地先住民のなかには不穏な動きをするものもあつて地元警察の反対もあるなかを、ほとんどが先住民のガイド兼ポーターを連れただけの一人旅であつたこと、などを考えるとこれは実に大変な記録である。それに、見事な文章のなかに先住民に対するまったく偏見のない態度や、動植物など自然についての豊富な知識などが読みとれ、今読み返してみても、素晴らしい山岳紀行の名著である。

ところが、著者鹿野忠雄とはどういう人か、わたしは戦後この人の名を聞くことが全くなく、一度調べてみたいと思ひながら五〇年を経て、たままた新刊書のなかに彼の名を見つけた。九二年に出版された山崎柄根による鹿野忠雄伝である。こ

れは周辺事情までよく書き込まれた、たいへん良出来た伝記で、興味があれば一読をすすめたいが、簡単に要約すると以下の通りである。

鹿野は一九〇六年生まれ、中学生のころから専門誌に寄稿するほどの昆虫少年であつた。生物の豊かな南方に憧れ、創設されたばかりの台北高校に進学したが、採集と登山に熱中して三年の過程を四年かかっても卒業出来ず、ただし台湾の山と動物に関してはすでに高名であつた。このころ彼を訪れた人のなかに酒戸弥二郎の名があり、ともに南湖大山と次高山に登っている。酒戸さんはユニークな人物評をする人なので、そんなことなら生前に鹿野のことを聞いておけばよかつた。やつと卒業した後、さらに一年を台湾で過ごし、三〇年に東大理学部地理学科に入学、彼の興味は生物地理学と台湾の高地先住民や離島紅頭嶼のヤミ族などに触発された民族学であるが、両方は無理とさとして民族学に傾斜してゆく。ただし辻村太郎の講義によつて氷河地形の事を知り、かつて登つた次高山の地形がカールではないかと気がついて、それを確かめるために出かけた時の紀行が「山と雲と蕃人と」である。この分野では、三三年に専門家の田中薫を案内してたぐさんの氷河地形を見つけるなど、興味の幅が広い。

学位を取つたのは四一年で、「次高山彙の動物地理学的研究」により、事情があつて出身の東大ではなく京大から授与されている。その祝いの会の出席者には今西錦司、森下正明、徳田御穂などの名がある。ネズミの固定を徳田に頼んだのがきっかけらしいが、京都にいろいろ縁があつたのにわたしは全く知らなかつた。

その後鹿野は動物学と生物地理学に区切りをつ

けて民族学に集中するが、この分野では日本の民族学の偉大なパトロンであつた渋沢敬三の援助を受けている。太平洋戦争が始まつてからは、それまでに集めた資料をもとに「台湾原住民民族図譜」や「東南亜細亜民族学先史学研究」などの著作に励むとともに、四二年には陸軍嘱託として九ヶ月間フィリピンで過ごした。目的は台湾からフィリピンへつながるバタン諸島の民族学調査であつたが、結局は現地の大学や博物館が所蔵する標本や資料を戦火から守るための努力に殆どの時間を費やしている。

ついで四四年五月には陸軍専任嘱託としてボルネオへ渡る。敗色の濃い戦争末期になぜと思うが、鹿野にしてみれば本土にいればいざずれ兵隊にとられるだろうし、ボルネオ原住民の調査という魅力に惹かれたこともあつたらう。これが結局彼の運命を暗転させることとなつた。奥地へ調査に出かけている間に米軍の攻撃が始まり、軍から現地召集を受けるが連絡が届かない。予定を大幅に過ぎるの帰途、日本軍敗走のただなかで、四五年七月一日、司令部のあつたサボンに向かう途中で行方不明となる。日本人に反感をもつ現地人も少なくないし、日本軍は全く無力であれば、なにが起つてもおかしくはない。ところが戦後、鹿野を知る欧米の学者の調査によると、彼は日本軍の憲兵に殺されたのであつて、それも撲殺だという。鹿野忠雄というスケールの大きな行動派の学者の、山と学問に対する情熱の軌跡を見事に描いたこの伝記は、最後になつて最悪の結果となり、なんともやりきれない思いで読み終えることにな

る。このごろ台湾の山を訪れる日本人は多いが、パ



鹿野忠雄氏の学位論文提出を祝う集り（京都）。前列左より、森下正明、可見藤吉、鹿野忠雄、今西錦司。後列左より徳田御稔、安江安宣。
編注：京都大学付属博物館館長、瀬戸口烈司氏（探検部部長）のご厚意により入手。

イオニアである鹿野忠雄のことを知っている人が何人いるだろうか、という思いがあつてこの小文を書き記した。

参考文献

鹿野忠雄「山と雲と蕃人と」（一九四一）中央公

論社。

山崎柄根「鹿野忠雄」（一九九二）平凡社。

編注

霧社事件…一九三〇年台湾台中州霧社で発生した

高山族（高砂族）の抗日反乱。日本人一三四名

が殺害された。（広辞苑、第三版による）

（一九九九年八月受理）

「亀」と「岡長」のじつ

四手井綱英

笹が峰のヒュッテが改築されるとのこと、うれしい話のだが、年とつた私には、もう何も御援助が出来そうにない。ただ思い出の多いヒュッテだつた。私達の三高山岳部時代は、冬は蔵平合宿、春は笹が峰合宿をして、その後で分かれて夫々雪山へ向かつた。

ヒュッテはいわば春山のトレーニングの場で、スキー練習の他、いわゆる頸城アルプスの火打や焼などの近くの手頃な山を日帰り山行をして、足腰をならしてから、何人かの組で雪山へ向かつた。私がこのヒュッテと親しくなつたのは一九三〇年頃、三高への入試に失敗して、中学の補修科で入試の勉強をしていた時で、同輩三人で涼しい笹が峰で勉強すると称して、このヒュッテで一月ほど暮した時だ。まだ出来てそう年月はたつていなかつただろう。この時から亀（峰村助治）とは仲良くなつた。中学生だつたのに亀をやとつて炊事万端をやつてもらつた。亀はこの笹が峰の古い住人で、当時はもう笹が峰の人は皆下りて誰もおらず、一軒だけわらびぎの残つた家があつたが、村営の牧場に変つていた。住めなくなつた理由は主産物だつたジャガイモに病気が発生して作れなくなつたからで、亀は関川のワラびぎの家に住んで、夏は笹が峰のブナ林で炭を焼き、春は岡長と組んで熊うちをしていた。ヒュッテが出来てから小屋の後始末、掃除、炊事万端を引き受けるようになり、一階のストロープの横の煙突の通る所が出来た小さ

な空間を亀の部屋としていて、寝るときは毛布にくるまって、その空間にもぐり込んでいた。

岡長は杉の沢の村はずれにおかみに旅館をやらせながら住み、ヒュッテの管理をして、物資の供給をやつていた。何年かたつてから、ヒュッテの近くに自分で小屋を造つて、スキー客を入れたり、年を通じて頸城アルプスの山案内をしたりしていたらしい。

熊うちはこのあたりに、亀と岡長しかおらず、毎春二人は組んで、熊を一、二頭うつていたらしい。しかし熊の一、二頭では生活にはあまりよい収入にはならなかつただろう。

ある春こんなことがあつたと亀から聞いた。

例年通り二人一組で熊うちに出掛けたが、ブナの木の間に入つてまだ出て来ない熊を見付け、亀が孔に近寄つて、第一発をうつたと言ふ。こういう冬眠からさめたての熊は孔の口の方を頭にして入っているのが普通なので、亀は熊の脳天めがけてうつたつもりだったが、どうしたわけか、この時は熊が尻を入口の方にして後向きだつたと言ふ。尻をうたれた熊はふり向き様に亀を爪で引掛けて谷間へほうりなげたと言ふ。普通だつたら、岡長が二発目をうつて熊を殺す段取りになつてゐるのに、熊が孔から顔を出すと岡長はうたげずに逃げた。熊はこの話をして、今後岡長とは絶対に組まないと声明した。亀の傷は大事に致らずにすんだが、一つ間違えば死んだかもしれない。岡長は薄情な男だ。亀はもう岡長とは熊うちはしないと断つていたが、頸城アルプスには他に熊うちはないので、その後この二人は組んで熊うちをしていたらしい。

亀は正直者で氣立てがよく、ヒュッテの炊事を

たのまれると、暇な時には手製のスキーを着けて兎打ちをして、夜は兎汁を食べさせてくれたりしたが、金もうけは下手で、何時も食うか食わずの暮しをしていた。その点も岡長とは全く違っていた。ある春亀の息子が小学校へ上るのに、カバンはおろか服も靴も買ってやる金がないと、亀のおかみさんがごぼすが、亀はそんなものなくても学校へは行けると平然としている。私達二、三人で金を集めて、息子の小学校へ入るのにいるものを皆買ってやったことがある。

亀は長生きして、高田の養老院か何処かに入って亡くなったと聞いたが、その後の家族のことは知らない。岡長は戦後だったか山で行方不明になり、そのまま遺体も出なかったらしい。

何年か前に町で岡長が、頸城アルプスを多くの人に知らせて、よい登山地帯にしたと言うので、岡長の顕彰碑が笹が峰に出来、私とその碑文を書いたことになっているらしいが、私は名前をかけただけで、未に見に行ってもいない。

春の笹が峰合宿の時は先発隊は学年末試験の結果を見ずに出かける。そして後発隊が発表を見てから行くのだが、笹が峰の宮の森あたりへ行くくとヒュッテの前に皆が出て集まっていた、大声で成果をたずねる。後発隊は、大声で落第、及第を知らせるのが習慣になっていた。

亀はほんとの山男で、勘が極めてするどかった。ある春、米がなくなつたので、亀が杉の沢まで取りに行ったところ、帰る時間頃になって急に天気が変わり、猛吹雪になった。一寸先を見えないと言う吹雪だ。その上夕がせまり暗くなってしまった。この天気ではさすがの亀もよう帰って来ないだろうと皆で言っている所へ、小男の亀が雪にまみれ

でころがるように入ってきた。笹が峰の何の目じるしもない牧場の片隅にあるヒュッテがどうして分かったか一同不思議に思つて尋ねたところ、吹雪と共に流れて煙突からの煙のにおいがたよりだったと亀は答えた。あの猛吹雪の中を流れる煙のにおいが分かるとは人間わざではないだろう。

この他、今西さんのインナーリオン講習会の話も面白いがやめておこう。及第したのはこの前の神戸地震で死んだ杉山佐一君一人だけで、後は全部落第。私はその直後、高橋健治さんのアルペルグスキー学校で健治さんにほめられ、すっかりアルペルグスキーで一生をすごしてしまった。今西のインナーリオンは、出来ないスキー術だとも今でも思っている。この他西堀さんのショートスキー論もあった。(一九九九年九月受理)

中国・萬佛華僑陵園で執り行われた 「梅里雪山勇士記念碑」除幕式 に参列して

船原 尚
(故船原尚武(ふなはら しょうぶ) 氏父上)

一九九九年八月六日。関西空港から、岩坪先生・広瀬様ご夫妻・工藤様ご夫妻・船原の六名で日本を発ちました。七日朝七時、中国登山協会張江援氏・趙建軍氏の案内で、北京の郊外、約三五千メートルにある陵園に車で向かい、八時すぎに着きました。陵園は予想をはるかに越える壮大な規模で、山を取り込んだ広大な敷地に、立派な建物や石造りの橋、大がかりな噴水が建設されて

おり、その見事な景観に驚きました。入り口の石造りの橋に立つと、正面に広場、その中央に噴水、広い階段を登ると朱塗りのどっしりとした大きな門、両側に坊舎と、その規模の大きさに目を見張り感服させられました。

正門の上には、「梅里雪山勇士永垂不朽」と黒地に白で刺繍、上下に黄色い房を施した横断幕を掛け、私たちを迎えてくれました。正門を入ると左側の斜面の上に、白い巨大な建造物が、下の方では大勢の人が、生花の花輪を飾ったり、放送の準備や清掃に懸命に働いておられました。前に廻って見ると「あっ！ここが記念碑。」とすぐ解りました。

記念碑(塔)の材質は、白色の漢玉色、高さ六・七四メートルが、斜面にそびえ立ち、上部には、雪の壁に挑む隊員二名の姿が大きく浮き彫りされ、右下方には、リュックを背負い一列で登る数名の隊員の姿が、線彫りで刻まれていました。碑の五メートル程下に納骨室、その上には、直径一・七メートルの純白の漢玉石に刻まれた花輪が置かれ、右横にリュック、さらに右横に雪上に残された足跡、足跡の後ろに、黒大理石に金文字で登山活動のあらましと、一七名の隊員の氏名が刻まれた記念碑という配置、全体で登山活動が表現されているように感じました。(写真一)

式は、納骨式と記念碑除幕式の二部に分けて行われました。

納骨式は、正門の前に集まり、遺骨を先頭に葬列を組んで、正門左側の小門から荘重な曲が奏でられる中を慰霊碑の前まで行列し整列、黙禱の後、中国の二遺族が納骨、続いて判別できなかった遺骨を岩坪先生が納められました。納骨が終わると、

写真2 記念碑

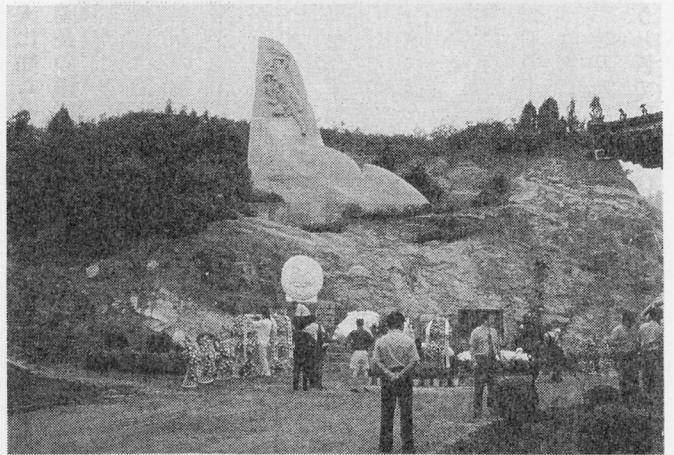


写真1 梅里雪山勇士記念碑全景

黒大理石に「梅里英雄」と彫り込まれた石版で封じられました。遺族の焼香に続いて、体育总局副局长・京都大学学士山岳会代表・雲南省登山協会代表・萬佛華僑園代表・登山協会関係者の焼香、と続き、全員が三礼をして終了、休息に入りました。

除幕式は十時から記念碑の前で、中国登山協会副主席李致新氏の開式の辞で始まり、国家体育总局副局长于再清先生・京都大学学士山岳会岩坪五郎先生により記念碑を覆っていた朱の幕が除かれ記念碑の全容が現れました。黒大理石に金文字が美しく、強く印象に残っています(写真2)。雲南省体育委員会副主任叶明寿先生により碑文の紹介、萬佛華僑園総経理石惠賢先生式辞、岩坪五郎先生式辞、于再清先生式辞と進み、最後に全員で一七名の隊員の御霊に三礼をして終了しました。

式には、事故当時懸命にご尽力頂いた戴文忠氏・陳尚仁氏・張俊氏・王鉄銘氏・金俊喜氏をはじめ多くの山岳関係者、日・中の遺族の方々など約百名にご参列頂き厳かに執り行われました。このように立派な碑を建立し、丁重な、しかも厳肅な式典を挙げて頂きましたご厚情に感激し感謝の気持ちをごみ上げてきました。

夜、食事に招かれましたが、王鳳桐氏も来られ、当時の懐かしい人々と親しく話す事が出来ました。記念碑に対しての思いを尋ねられ、彼らの登山活動の精神をこのように讃え、後生に残る立派な碑を建立された事に感謝の意を伝えましたところ「私たちは、梅里雪山学術登山隊の中日友好の精神を大切にしている。遺族の方々とは親戚と同じ気持ちで接したい。」と話されました。また、

「遺児が成長し、父親の足跡を尋ねたいと思ったとき、どのようにすればよいのか不安です。この気持ちは奥さんも、兄弟も、親も同じだと思えます。」と話すと「何時でも登山協会に連絡を下さい。」という返事があり、気持ちが楽になりました。短い時間でしたが、有意義な時を過ごす事が出来、感謝しながら中国を離れました。除幕式に参列出来て良かった。という思いが、時がたつにつれて強くなってきました。お世話をお掛けした岩坪先生にお礼を申し上げますとともに、AACKの皆様、並びに中国登山協会の皆様にお礼を申し上げます。(一九九九年九月受理)

梅里雪山峰登山隊 搜索報告から抜粋

去る七月十一日、現地収容隊の人見五郎が無事に帰国し、小林尚礼(現在、現地でパトロールを継続中)と共に明永氷河で収容した遺体のご遺骨と遺品を持ち帰って参りました。当日夜、関係のご家族に京都へご参集いただき、身元の明らかとなったものについてはご家族の元へお返しいたしました。

調査状況について報告します。

一 遺体について

全部で四名の隊員の遺骨をそれぞれ分けて持ち帰って参りましたが、それらの一部づつをまとめたいものも一組用意し後日、比叡山の鎮嶺碑にお納めする予定です。

二 遺品について

気象に関する記録ノートが見つかり、井上治郎隊長の筆跡であることが夫人によって確認され、夫人にお渡ししました。

中国語の教科書はその内容と出版年から佐々木哲男秘書長以外に持ち主が考えられないとの結論にいたり、夫人にお渡ししました。

「Tom」と署名のあるザックが見つかり、その署名は清水久信D.T.のものであることが大井様によって確認されました。

「Funahara」と書かれた青い未使用と思われるスパッツが一对見つかり、船原尚武隊員のご両親にお渡ししました。

三 収容隊の今後の予定について

小林尚礼が徳欽県に残り定期的に明永水河をパトロールし、今後の新たな発見に努めます。この作業は融雪の終わる八月末までの予定ですが、終了時期については現地の様子に応じて後日決定の予定です。

小林尚礼への連絡は次の通りです。

郵便番号674000 中国雲南省迪慶州徳欽県 体育運動委員会 高虹先生 転交 小林尚礼先生 収

遙かなる徳欽より

小林尚礼

パコヤシです。元気です。これまでのメールは全て目を通しました。皆様、大変ご苦勞様です。

私の方は希望通り明永村の村長宅に滞在できることになり、順調に進んでいます。以下はこちらからの報告です。

七月七日に大理でハイガさんと別れてから、麗江、中てんと歩を進め、現在徳欽のホテルにいます。

七月十四日の午前中に明永村に入る予定です。

徳欽での荷物の管理や移動の手配等は、全て徳欽県体委の高虹氏が面倒をみます。公安副局長のニマ氏も頼もしい存在です。また今日、カワクボ酒店(徳欽の最新ホテル)の売店員が日本語を勉強中であることを知り話をしました。基本的な会話は十分通じます。早速、晩にカラオケに出かけ(彼は酒は余り好きではない)、朋友になりました。彼への連絡は、カワクボ酒店のフロント(0086-0887-8413188)へ電話し売店のキウウ(丘十とさん)謙さん呼びます。

また、中村保さんから紹介を受けた旅行社に足運びました(このとき通訳してくれたのがキウウさん)。確認したことは、以下の点です。

・パコヤシ十ガイド十馬方十馬三匹が最小構成員で、費用は一日八百元である。(通常は一千元/日らしい)

・(梅里西面の偵察のために)数日間同じ場所に滞在することは可能。

・詳しい打合せはパコヤシが明永村を引き上げた九月中旬以後に行う。

この話とは別に、高虹氏から梅里巡礼を体委としてアレンジしたい、旅行社も安く上がると持ちかけられました。この計画は個人として行くので、実際に行く段になったら体委にも良く説明し、条件の良い方を選びます。

徳欽の気象台に、上田研の提案で設置した温度計は、その後の上部の判断で取り外されています。仕方ないので体委の軒先にぶら下げました

(内藤キユリさんへ)。また、気温・降水量のデータはそれぞれ十元/月とのこと。その他細かい報告はハイガさんに渡した文書の手紙です。

イリジウムでのメールの送受信は、今の所原理的にできません。次回私が発信するのは徳欽の町が恋しくなった数週間後になります。それまでの緊急の連絡は、ポケベル(0078-8816-511-98115)をお願いします。(一九九九年七月十四日記)

笹ヶ峰ヒュッテの片づけと地鎮祭

横山広太郎

皆様ご存知の通り、笹ヶ峰ヒュッテの改築が進められています。ここでは六月から七月、地鎮祭前後の現地の経過をお伝えします。

改築についての関係諸機関との折衝や工事の取りから、七月上旬にヒュッテを解体することになりましたので、それに先だつて六月末にヒュッテの中を片付けることにしました。これには現地に近い横山を中心にあたることになりました。六月二六日夜には改築委員の秋田雅規君や、若手も加えて九人が集まり、また前田司さん(AACK)の一行七人も加わって、ヒュッテのあれこれを語りながら一夜を過ごしました。

翌二七日は雨、朝食後に片づけを開始しました。テール・いすを外へ出してから、記念になるもの、使用可能なものを選んで段ボール箱などで梱包し、十二時過ぎ、ヒュッテ内部の片づけを完了しました。本、調理器具、食器、工具などの梱包

が主に段ボール箱で約三十梱できました。そのほかに、テーブル、いす、シユラフがあります。中電産業の協力により二台のトラックで保管する物品を妙高高原駅近くの倉庫に搬入した後、解散しました。

その後、七月三日に解体、二日にその前の内部最終整理という日程が決まったため、一日、横山が中電産業と現地で行い合わせを行いました。解体前に内部に残っている物品をすべて搬出し、プロパンガス関係は安全なところに保管する、畳・古い寝具等の不要物品は適切に廃棄するといった整理作業を中電産業にお願いしました。

打ち合わせが終わって一人残った私は、夏の雲の下、赤い屋根の姿を写真に納め、ヒュッテに感謝の酒を献じてからヒュッテをあとにしました。池の峰へ回り込むところで車を止め、緑に埋もれてほとんど見えないヒュッテに向かってカメラのシャッターを切った直後、背後から流れてきた霧がすべてを包んでしまいました。

七月三日は雨のなか、朝から解体工事および整地が行われました。

七月四日、曇り時々晴れとまずまずの天候のなか、地鎮祭が行われました。参加者は上尾庄一郎（会長、田中二郎山岳部長（改築委員長）、笹谷哲也、原田道雄、小澤良夫、原剛、秋田雅規、杉山茂の各氏、横山、設計者の中津敏明氏、杉野沢の竹田克巳さん・マサエさんご夫妻、中電産業から増田和生氏（OB）ほか約十名が参加しました。神主さんの祝詞、お祓いがあり、出席者は玉串を捧げ、工事の安全と無事完成を祈りました。次いで鍬入れ式となり、中津氏が鎌、田中部長が鍬、増田氏が鋤をふるって、工事が開始されました。

十一時十分、地鎮祭は滞りなく終了し、神主さんの音頭で参加者全員祝杯をあげました。その後、改築委員会の各氏により水源調査、ストーブの件で業者さんとの打ち合わせ、また設計の詳細打ち合わせが行われました。新しいヒュッテの位置は、これまでより少し東側になりました。工事開始が七月にずれ込んだため、厳しい作業日程になっていると思いますが、九月十日には上棟祭が無事行われたところです。コンクリート造の一階の上に、旧ヒュッテの面影を残すマンサード屋根を持った木造部分の骨格が姿を見せており、十一月の完成が待たれます。（一九九九年九月一四日受理）

ヒュッテ再建進捗状況

笹ヶ峰ヒュッテ改築委員会委員長

田中二郎

一 募金について

本年二月二十二日付け趣意書と募金のお願いで対し、現在三八二名の方々から募金申し込みをいただき、うち三五三名からすでに送金をしていただきました。

当初の募金目標額三千万円をクリアしましたので、みなさまのご期待に背かないだけ充実した京大ヒュッテの再建をめざして、現在、改築委員会と施工業者一体となって建設に取り組んでおります。

会員の方々で、まだ寄付の申し込みをしておられない人は、今からでも結構ですので、どうぞよろしくお願いいたします。来年三月まで免税募金

のお申し受けをいたします。改築費用実費を支払った残余のお金は、将来の手直しや修理および維持管理費用のために大切にプールしておきます。こうした予備金はできるだけ多めにとっておきたいと考えますので、会員諸兄のさらなるご援助を切にお願い申し上げます。

二 建物の規模・敷地・仕様

平面規模は旧ヒュッテの五間×四間より大きく、五間×五間（九×九メートル）。敷地は、水捌けと見晴らしを考慮し、旧ヒュッテよりわずかに北東部に移動。基礎は鉄筋コンクリートのべた基礎の上に三メートルの壁式構造部を設け一階とする。この上にマンサード屋根木造二階建ての構造物を築いて、外観上は元のヒュッテに近い形とする。壁面にはペアガラスを多用し、開放感と展望を重視する。電気による照明、給水、食物保冷、石油ボイラーによる給湯、プロパンガスによる調理器具を設備し、快適、清潔、安全を追求する。

三 改築手続き

京都大学、文部省、大蔵省、環境庁、新潟県、妙高高原町など多くの関係機関と、調整や許認可のため折衝が必要で、改築工事の着手が遅れましたが、七月三日旧ヒュッテの解体、七月四日地鎮祭の運びとなりました。

四 上棟式

日時 九月十日午後四時～五時
場所 京大笹ヶ峰ヒュッテ

五 竣工式の予定

当初竣工式を十一月三日文化の日に行う予定をたて、寄付申し込みしていただいた方々に、地鎮祭のご案内と竣工式の予定日をお知らせしました。しかし、多くの方々にご出席していただき盛

大にお祝いするためには、むしろ十一月六日(土曜日)に開催した方がよいとの結論にたつき、日時を変更しました。

九月中旬に、寄付申し込みしていただいた方および笹ヶ峰会会員全員に、案内を差し上げる予定ですが、まだご寄付いただいていない方も是非お越しくださるようお願いしております。(当日、ご寄付の受付もいたします。)準備の都合もあり、参加者の人数を前もって把握しておきたく存じますので、ご参加の方はあらかじめ改築委員会にご一報賜りたくよろしくお願いいたします。

基竣工式

日時 十一月六日(土) 午後一時より

場所 笹ヶ峰ヒュッテ

式終了後、祝賀会(宴会)を予定しています。当夜笹ヶ峰で宿泊される方はシユラフをご持参下さい。ヒュッテの収容人数に限りがありますので、



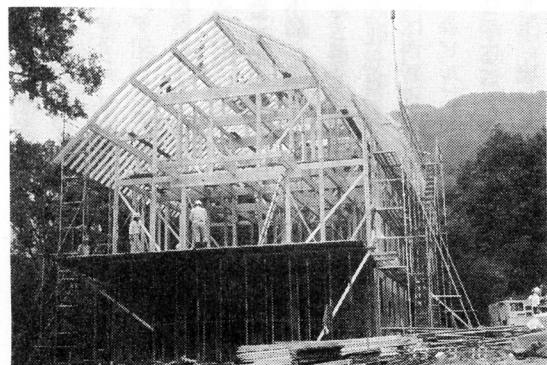
地鎮祭。建設位置は、これより左手に決定された。



地鎮祭で鍬入れする田中山岳部長。右は竹田夫妻



7月1日、解体直前のヒュッテ



上棟式直前の建物の様子。2~3階木造軸組組立。

若い元気な方々にはテントで寝ていただく可能性
があります。

六 管理運営

改築委員会、山岳部およびその周辺で新しいヒュッテの管理運営につき話を進めています。今年の暮れー正月は現役のスキー合宿に使われる予定ですが、来春までは一般開放はできません。おそらく早くても来年五月連休がヒュッテ開きになるでしょう。それまでに維持管理の方法を煮詰める予定です。建設的なご意見を歓迎いたしますので、改築委員会までお寄せ下さい。

「ヒュッテ改築についての最新の情報がAACKホームページ(<http://www.aack.or.jp>)に刻々と掲載されています。ご一読ください。」

(一九九九年九月一五日受理)

お知らせ

○梅里雪山・氷河トレッキングと玉龍雪山ハイキング十一日間(アルパインツアーサービス(株)主催)

一九九九年十月二四日(日)～十一月三日(水)

四万五千円

二〇〇〇年四月二三日(日)～五月三日(水)

三万八千円

二〇〇〇年五月二五日(日)～五月三五日(水)

四万八千円

【費用内訳】

利用予定航空会社・日本エアシステム

ツアーリーダー・良明より良明まで同行。発着地によっては全行程同行する場合もあり。

最少催行人員…十名

食事…朝十回、昼十回、夕十回
利用ホテル…

一人部屋利用追加料金…六万八千円。(明永のロッジまたはテントを除く。)

ビザ…中国

トレッキング…現地ガイドが同行。荷物は馬が運搬。寝袋を各自ご持参下さい。

無名・奇峰の未踏峰が無尽蔵に覆う山域を車とハイキングで中国の山旅。雲南最北部辺境地帯は金沙江(長江)、瀾滄江(メコン河)、怒江(サルウィン河)のまったく違う流域に河口をもつ大河がわずか六〇キロメートルの間を並走して流れるため、三江地域と呼ばれています。この奇異な地形のため東西に横断が困難なことから、この山域を横断山脈と呼ぶようになったとも。多くの探検家の羨望の的となってきたこの辺境の地ですが、最近では道路や設備等もずいぶん整備されてきました。

【スケジュール表】

一日…東京(羽田)からは朝、国内線で大阪へ。大阪(関空)発、空路、春城と呼ばれる雲南省の省都・昆明(二千メートル)へ。(機・夕)昆明泊(H)
二日…昆明より空路、玉龍雪山山麓の麗江(二千四百メートル)へ。着後、専用車で玉龍雪山山麓の白水へ。チェアリフトにて雲杉屏へ。玉龍雪山を仰ぎながらシャクナゲの尾根を下りのハイキング(約一・五時間)。夕刻、四方街散策。(朝・昼・夕)麗江(リージャン)泊(H)

三日…雲南/チベット公路(茶馬古道)を進み、玉龍雪山(五五九六メートル)と哈巴雪山(五三九六メートル)の間にある金沙江(長江)の峡谷、虎跳

峽を見学し、中甸(三三〇〇メートル)へ(約二キロメートル)。着後、チベット仏教の松贊林寺見学。(朝・昼・夕)中甸(ジョンディエン)泊(H)

四日…白芒雪山(五二三七メートル)の麓を通り雲南省最高峰梅里雪山(六七四〇メートル)山麓、英国人キングドン・ウオードがその著「青いケシの国」で滞在した(旧名・阿敦子(アトンズ)徳欽(標高三四〇〇メートル)へ。(約一八〇キロメートル)

(朝・昼・夕)徳欽(ドオチン)泊(H)

五日…専用車で徳欽発、最高峰カワグボ(六七四〇メートル)、第二峰メンジボ(六〇五四メートル)、奇峰・五冠神山(五四七〇メートル)等の太子三峰を望む飛来寺へ。雄大な景観を楽しんだ後、現地スタッフとともにトレッキング開始。徒歩で、明永氷河を間近に望む明永村まで、トレッキング。

(朝・昼・夕)明永村泊(L)

六日…現地ガイドとともに氷河舌端まで往復トレッキング。その後、往路を徒歩で飛来寺へ。着後、専用車で徳欽へ。(朝・昼・夕)徳欽(ドオチン)泊(H)

七日…徳欽滞在。東側背後の山に往復ハイキング(約四時間)。また、専用車でメコン河渓谷を訪れる等で過ごします。(朝・昼・夕)徳欽(ドオチン)泊(H)

八日…往路を中甸へ戻ります。(朝・昼・夕)中甸(ジョンディエン)泊(H)

九日…往路を麗江へ戻ります。(朝・昼・夕)麗江泊(H)

十日…空路、昆明へ。着後、昆明市内観光。希望者は終日石林観光を手配(別料金)することも可能です。(朝・昼・夕)昆明泊(H)
十一日…午後、昆明発、帰国の途へ。夜、大阪

(関空着、国内線で羽田着。(朝・昼・機)

◆ツアーのお問い合わせ、お申込は左記へ。
旅行主催…アルパイン・ツアー・サービス(株)

大阪支店 / 〒550-0004

大阪市西区靱本町一―十一―二二

ポロロッカビル四階

Tel:06-6444-3033 Fax:06-6444-3032

担当…大島 義広

E-mail: osats1@pearl.ocn.ne.jp

東京本社 / 〒105-0003

東京都港区西新橋一―十二―一

西新橋一森ビル二階

Tel:03-3503-1911 Fax:03-3508-2529

担当…児玉 康

E-mail: kodama@alpine-ts.co.jp

○関東木曜日の会

関東在住の会員ならびに山岳愛好者の定期的な集いを計画しました。初回は十月二八日に予定しています、ぜひご参加ください。会費実費。

日時 十月二八日午後六時より。

場所 ホテルニュー神田二階和亭淡路町

千代田区神田淡路町二―十

地下鉄淡路町駅、JRお茶の水駅至近

Tel:03-3258-3911

ご参加の方はできれば岩瀬 (Tel:03-5627-2469) に一報ください。

○米本昌平 吉野作造賞

本年度の吉野作造賞は米本昌平氏の「知政学のすすめ」中央公論社刊)に決まった。授賞式は十月十四日東京会館にて行われる予定。

會員動向

○物故会員名簿
本仁桑次郎

連絡先・本仁久一郎
〒572-0002 寝屋川市成田東が丘13-2

訃報

池野直志

一九九九年三月十五日 交通事故で死去

遺族・池野朱子（長女）

〒177-0035 東京都練馬区南田中四―四―二〇

ファムール井荻三〇一号

Tel.03-3995-1304

筒井芳則

一九九九年七月十一日 タイ、プーケット島で

死去

遺族・筒井洋子（夫人）、威彦（長男）、麻里子

（長女）

〒215-0003 川崎市麻生区高石―一六―四

編集記

この度図らずもニュースレターの編集長に指名されました。私はたくさんの山には登っておりま
すし、専門である石油開発にも長年拘わってきま
したが、書いたものをまとめたり編集したりする
ことには全く経験がありません。正直に申し上げ

ますと、私はそのようなことにはまことに不適格
な性格なのです。

AACKには優れた才能に恵まれた会員が多数所
属しています。著述家として、あるいはジャーナ
リストとして立派な業績をあげている方々が会員
名簿に名を連ねています。今回の突然の指名がど
のような由来で私のところに飛んできたのか見当
もつかないのです。しかし会のために貢献するこ
とにやぶさかではありません。自分の浅学非才を
世に晒すことになりそうですが、二年くらいを目
途にして編集作業に勤めます。よろしくご支援く
ださい。

他人から小言を賜ったり、叱責を受けることを
私はあまり苦にしません。むしろ歓迎しています。
助言を受け入れるにたいへん敏であり率直です。
ニュースレターについての会員諸氏の率直なご意
見をどのような形・手段でも結構ですから編集事
務局にお寄せください。

そもそもニュースレターは会の義務で発行して
いるのではないと思っています。それは会の運営
を円滑にするためのものであり、会の存在をプロ
パガンダするものでもありません。出来るだけ多く
の会員がニュースレターを通して会の活動に参画
してい頂きたいと思えます。投稿は大歓迎です、
お待ちしております。

はじめての編集なので原稿集めは大変心配して
いました。何人かに執筆をお願いしてありました
が、突然の事情でそれが叶わぬことになった方も
ありました。いっぽう予想外のものをお送りくだ
さった方もあり、編集者の技量とは異なり、立派

な内容のものができたことをうれしく思っていま
す。

最初の編集で池野、筒井両氏の訃報をお伝えす
ることになるのは誠に悲しいことです。二年前に
登山家広島三朗氏がパキスタンで遭難されたとき
も同様の気持ちでした。広島氏とはザイルを組ん
で何度かアイスフォールを登った経験があります
が、彼の慎重な行動をつぶさに観察し、この人な
ら遭難はあり得ないと確信しておりました。その
広島氏が氷河なだれによる爆風が原因で遭難しま
した。信じられないような事故でした。その直後
に生態学者井上民二氏がサラワク州で遭難、逸材
の喪失でした。

老境に漂うオールドボーイには、有能な若い
方々の活躍を見守ることができなのが最上の喜び
です。彼らを失うことは本当に悲しいことです。
池野、筒井両氏のご冥福を祈ります。

皆様のご健勝とAACKの発展を祈っています。

編集委員 沖津文雄、吹田啓一郎、竹田晋也

発行日 一九九九年九月三〇日

発行所 京都大学学土山岳会

京都市左京区吉田本町

京都大学工学部建築系

吹田啓一郎 気付

製作 京都市北区小山西花池町一―八

（株）土倉事務所